

タイトル名「対人援助実践をレポートするこの一冊」

第22回：第3章-その7-

「シネマティック自己覚知のススメ」

著：小幡知史
企画：渡辺修宏
小幡知史
二階堂哲

本企画ワークショップの総括

本企画ワークショップ「対人援助実践をレポートするこの一本」は、2022年1月30日（日）にオンラインにて実施されました。

多様かつ各々異なるバックグラウンドを持った5名の発表者が、それぞれの対人援助実践において大きな影響を及ぼした映画作品を紹介しました。二階堂哲先生からは「プリズンサークル」・「生きる」・「カッコウの巣の上で」、小幡からは「ペイフォワード- possibleの王国-」、長谷川福子先生からは「クレヨンしんちゃん-大人帝国の逆襲-」・「誰も知らない」、神山努先生からは「レナードの朝」、渡辺修宏先生からは「グリーンブック」の計8作品が紹介されました。

紹介された作品は、ジャンルはもちろん、テーマからストーリーまで何もかもバラバラで、まさに“多様性”に溢れていました。さらに“なぜ”それぞれの発表者にとって、その映画作品が自身の対人援助実践において大きな影響を持つに至ったのか、まさに対人援助をレポートする一本になったかという経緯や動機もまた、多種多様でした。

実は、ワークショップ開催前の打ち合わせでそれぞれの発表者がどのような作品を紹介するのかは事前に把握していたので、開催直前までは「あー、聞いたことあるけど見たことない。ワークショップの後に見てみよう!」、 「あーこれね、確かに名作!」、 「みたことあるけど…そんなだったかな?」など、なんとなく軽いノリでそれぞれの映画作品を捉えていました。しかし、それぞれの発表者がなぜその映画作品を選んだのか、そのエピソードや動機を聞く中で、ある種、ゲシュタルト的な形で共通する内容が自身の中で浮かび上がってきました。

それは、すべての発表者が、視聴前まで抱いていた様々な葛藤や悩み、疑問や想いが、映画作品というものを媒介にした考察という俎上に上げられ、そこから得られた様々な着想をきっかけとして自分自身の自己覚知に結実したのではないか、というものです。

簡潔に言えば、映画を通して視聴者が“癒され”，そして“成長し”，自己覚知に至ったと

いうことです。

映画を通した自己覚知

本企画ワークショップの冒頭で、渡辺先生より「シネマセラピー」についてのご紹介がありました。渡辺先生いわく、シネマセラピーとは、「映画を観て語り合い、自分の深層心理に気付くことで、“癒し”を感じ“自己成長”を目指すという心理療法」でした。これはまさに、上述した“癒し”と“成長”の過程とオーバーラップします。また単に映画を通して自己覚知に至っただけでなく、個人的な印象ではありますがすべての発表者が映画を通した自己覚知が、さらに自分自身の信念や哲学といったものの根底にある基礎のひとつとなっている印象も受けました。すなわち、映画によって“癒され”“成長した”うえで、さらに自分自身を形成する“礎となった”のです。これはまさに、映画作品が援助者自身の対人援助実践を「レポートした」と言えるでしょう。

ただ一方で、今回のワークショップで紹介された映画作品が、あらゆる人にとっての「対人援助をレポートする一本」になる得るとは限らない、とも感じました。なぜなら、それらの映画作品が「対人援助をレポートする一本」になったのは、視聴者たる対人援助職者が視聴前に苦悩や悩みなど様々な心理的葛藤を有し、視聴した映画作品の“なにか”が心理的葛藤の解決にリンクし、さらに視聴者が心理的葛藤と映画作品の“なにか”がどのようにリンクしているのかを自分自身で気付き、その気付きをもって自身の対人援助実践の礎とする、という、いわば「個人と映画作品との相互作用」こそが肝要であるという印象を受けたからです。

またさらに、今回の発表のように“なぜその映画作品が自分自身にとって対人援助をレポートする一本になったのか”という過去の相互作用を読み解き再解釈する過程もまた、非常に大切な取り組みだったのではないかと考えます。

上述のことから、本企画ワークショップは単におすすめの映画作品を紹介するだけのものではなく、「発表する」という行動を通して「対人援助をレポートする一本」を再発見するという、ある意味でまさにワークショップだったように思います。今後もこのようなワークショップを開催し、映画を通した自己覚知、いわば、シネマティック自己覚知の輪を広げていくことも大切なのではないかなと考えました。もしご興味がある人は、ぜひご一報ください。

—つづく—